

宗學觀に於ける個的立場と

種的立場

茂田井教亨

周知の如く個物の問題はアリストテレス哲学の中心問題であつたが、プラトンのイデア論の立場から離れてそれを個物に内在するものとした。しかしイデアは要するに理念的であり、理念的なものはいかにそれを限定しても現実性には達し得ないし、かもイデアは論理的には普遍的であり、普遍はいかにそれを限定し特殊化しても個物には達し得ない。

このアリストテレスの実体概念—主語となつて述語とはならないもの—を以てしては個物の問題は解き得ないのである。然らば個物とは如何なるものであらうか。田辺博士によればそれは連続の始源、連続發生の原理たる動性を現はすものと解される（「社会存在の論理」哲学研究昭和九年十二月号）。即ちそれは自由を意味するものである。

特殊からの限定を逆転させ、その逆限定をなすものである。個人としての我々は、どこまでも社会とか環境とかから限定さ

れるといふ意味を有たねばならないものであるが、しかし又、さういふ限定の極限に於て却つて限定し返すといふことがなければならぬ。創造といふことはそこに考へられるのである。宗學に於ける創造宗學とはかゝる意味に於いて理解せられるのである。

然るに我々教団人は、個人であると同時に教団の一人としてその個々が齊しきものを所持すると考へられるイデアを有つのである。即ち一であると同時に多を含みつ、非現実性の一面を有つのである。國家又は社会に於ける我々の個的存在は、既にそこにあるものとして企投性を有たないといへるが、教団人としての我々の個的存在は、みづからを選んでその教团的社會に投じた企投的な性格のものである。このことはその自覺の有無に拘らず、何等かの意味に於てイデーである。このイデー的なものを、私は「指標としての信仰」と見るのである。信仰といふものゝ多様な性格の中から「指標」としての性格をイデー的と見るのである。然らばこの指標としてのイデー的なものは何から生ずるのであらうか。こゝに改めて宗祖の「宗祖性」を考察しなければならぬ。なぜなら、私は指標としての信仰の具体的なものを宗祖に於て見るからである。

宗祖が立教の決意をなされた時の二者択一の苦悶は、過去否定と自己顯現の困難に於ける煩悶であつた。そして不退転を願じられた宗祖は、宗祖みづからが眞の個体となられたことを意

味する。即ちそれは單なる「連続的存在の分割の終末を意味するものでなく、それ自身有と無との統一の運動を意味し、連続の終末ではなく、却つて連続の始源、連続發生の原理たる動性を現はし」たものに外ならない。こゝに個体の本質たる自由自発性を認めることができる。これは宗祖といふ空間的存在が、時間的様相をとられたことを意味するであらう。その時間的といふことは、連続發生の始源としての動性に於て、非連続の連続となるからである。教団の形成の最初はかくして始められたと見られるであらう。即ち宗祖の空間は同時に時間を含み、又それと同時に空間的であるその周囲は、齊しきイデーのなものに於て時間的となるのである。換言すれば、時間的には系譜法脈の面を、空間的には教団の意義を形成する。宗祖はその *starting point* ともいふべきものであらう。宗教の純粹体験の世界に於ては、いふ迄もなくイデーのものはないのであるが、その体験の信仰が「信仰せしめられるといふ」指標たる性格を現はす場合、常にイデー的となることは、東西古今の宗教々団の発達史が物語る嚴然たる事実である。こゝに強靱にして聖なる宗教的活動が可能となるのである。我々はかゝる世界に於ける一ポイントに外ならない。個体としては一應個々の宗教体験を有つと共に、イデーのなものに於て鑿がれてゐるものといはねばならない。

私はこのイデー的なものは、種的形成の基礎として常に個物

否定的なものではないかと思ふ。元來、個体の本質はその存在と非存在との自由にあるといはれる(田辺社会存在の論理)あらざるを得るものが自己の意志を以てある、といふ自由が個体の本質をなすといはれる(全上)。故に個体は裏からいへば、非存在をも自由に選び得るもの、即ち自殺を能くするものであるといはれる(全上)が、我々はかゝる自由性に於て教団的イデーの中に自殺し得るものといへるであらう。それが信仰的には Active ではなく Passive と受取れる所に宗教々団の強靱性があると考へられる。教団の種性格の強固さはかゝる面から生ずるのではあるまいか。パスカルは「自己の周囲の無限の空間の沈黙が怖い」といふ意味のことをいつたが、我々の周囲の空間は常に我々に対して呼びかけ、仿きかけてゐるのである。私はこの呼びかけ仿きかけに対して無爲無能であることが怖しいのである。

二

元來、我々が一つの宗学を有つとか、或る宗学觀に立つとかいふことは、一應個体としてそれを有つことである。六百五十年に互つて蓄積せられた宗学的体系が如何にして爲されたか、私には具体的にそれを論及する知識を有たないが、恐らくそれは個体の蓄積であつたらうと推測する。しかしその個体的自由性は、系譜即ち相承といふ時間的な面に於て常に否定的に進展

されつゝあつたであらう。假令、自由性を發揮して分派独立を敢へてしたにしても、常に系譜あるものとして自己の立場を確感づけたに相違ないのであらう。こゝに種的基体としての教団の強韌性を認めないわけには行かないのである。尤も、種なるものは個と類との中間に在つて、一般には非合理的性格のものとされている。教団を直ちに種的基体と規定づけることにはなほ問題のあること、思ふが、宗祖が示された強烈なる宗祖性によつて統一強化された教団は、個によつて存立するものであるにも拘らず、能く個を否定し、個の分立論理を否定しつゝ、分有の論理に立たうとするその特質に鑑み、教団を目して種的基体と称したのである。勿論、教団が直ちにゲマインシャフト又はゲゼルシャフトと呼ばれるべき社会と一般とはいへないが、團結を必要とし、齊しき理念に於て活動せんとする限り、特殊な一社会と見るとは差支ないであらう。この教団社会に於ける種と個との対立は、一般社会存在の理論に於けると同様の激しい対立はないが、個なくしては種はなく、種なくしては個のないこと、一般と同様である。しかも上述の如く、種的教団の有つイデー的なものが、或る程度迄個の自由性を支配することに於ては、寧ろ一般社会以上に複雑性を有つともいへよう。この両者の微妙なる関係が健全なる姿に於て發育進展を示す所にのみ宗門の發展があるのである。信仰的には常にそこには宗祖が生きていふことになるであらう。宗祖が生きていふことは、

特殊なるものが個である我々を媒介として更に類的普遍にまで押し進められるといふことになるのでなければならぬ。宗學はこの發育進展の指導原理となるものでなければならぬ。それが單に個的立場にのみ止まるならば、種的形成の共同性を疎外し、護教性を喪失するであらうし、單に種的立場にのみ走るならば、過まれば御用教學に終り、創造性を喪失するであらう。これを要するに、自由自発性を本質とする個体として宗學する立場は、所謂創造的世界の創造的要素として自らを主体化し、個性化し、他の個と相互限定的立場に立つものである。これに對して種的立場に於て宗學するといふことは、個性否定的に非現實的であり、イデー的に教団形成的たらんとするものである。前者は創造性に富み、後者は護教的に勝るといへるであらう。しかし、如何に個的立場に於て宗學するとしても、宗學の本質上、單に個体の自由からいつて恣意的にのみ教學をその対象とすることはできない。宗祖の宗教體験の内容を自己の體験とする追體験的姿に於て、なほ自己否定的たらざるを得ない。又、如何に種的立場に於て宗學するにしても、「宗學する」といふ述語の限定面に於ては個物となるの意味がなければならぬ。然らざれば種的立場に於ける宗學といつても、それは真に種的立場に於ける宗學とはなり得ないであらう。即ち両者は常に相互媒介の形に於て相互に否定し合ふのでなければ、真に具體的宗學とはなり得ないのである。